# 小治田宮の井戸
## －井戸枠の年輪年代と出土土器－

相原　嘉之
光谷　拓実（奈良文化財研究所）

## Ⅰ．はじめに

小墾田宮は西暦603年に推古天皇が豊浦宮より遷した宮殿である。その後『日本書紀』『続日本紀』等の史料によると、奈良時代までその名がみられ、正史に最後に現れる天平神護元年(765)までは正宮・離宮として存続していたものと考えられている。その小墾田宮の推定地としては明日香村豊浦にある古宮遺跡を中心とした地域と考えられており、発掘調査によっても７世紀初頭から前半にかけての庭園遺構が検出されている（奈文研1976a)。しかし、昭和62年に至って、飛鳥川を隔てた雷丘東方遺跡において奈良時代末の井戸から「小治田宮」と記された墨書土器が出土、奈良時代の小治田宮については雷丘周辺にほぼ確定した（明日香村1988)。さらに遡った推古天皇の小墾田宮についても周辺に推定されることとなった。この墨書土器が出土したことによって、小治田宮及び小治田地域の位置がほぼ確定したと同時に、他宮殿との位置関係についても有力な視点が得られたことになる。

筆者は以前にこの墨書土器と井戸について検討する機会があり、出土土器の年代観から、この井戸は８世紀末頃に作られ、９世紀前半にわたって使用、９世紀後半には完全に埋められたと考えた（相原1999)。また、井戸の所属についても出土した墨書土器の詳細な検討から、一貫して小治田宮の井戸であることも検証した。今回は奈良文化財研究所の協力を得て井戸枠材の年輪年代測定を試みた結果、井戸枠材の年輪年代が判明したのでここに報告し、あわせて若干の整理をしておきたい。

## Ⅱ．井戸の概要

今回年輪年代測定を行った雷丘東方遺跡の井戸（ＳＥ０１）は雷丘の東南に位置する。南北4.8ｍ、東西4.5ｍ、深さ2.6ｍの掘形に、内寸1.68ｍの方形横板組隅柱横桟止め井戸枠をもつ。井戸枠材はヒノキ板で、最高８段まで遺存しており、さらにその上に角材が横たわっている。この上にも遺存度は悪いが木質材がみられる。枠板は長さ1.8～1.9ｍ、幅25～30㎝、厚さ５～６㎝である。枠板の組み合わせは、上部４段と下部４段とでは異なる。上部は枠板の両端を凸形にしたものと孔穴にしたものとを組み合わせ、下部は板材の両端を凸形にしたものと凹形にしたものとを仕口として組み合わせている。井戸底には湧水を伴う砂層上に最下段の井戸枠を据え、枠内に玉石を厚さ10㎝程敷き、さらにその上に川原石を１～２段敷く構造をとる。また、枠内の四隅には補強のための隅柱があり、井戸の改修を示すものと考えられる。

井戸内の堆積土はおおきく４層に分かれる。下層堆積土は石敷直上の多数の墨書土器を含む暗黒色粘土で、井戸使用時に堆積した土層である。中層は下層堆積土上1.5ｍにも及ぶ暗灰色粘土で、廃絶時に埋められた堆積土と考えられる。上層は暗灰褐色土、最上層は埋め立て後に土坑状の窪みに入れた土と推定される。

写真１　井戸全景

写真２　井戸枠全景

写真３　井戸枠下部

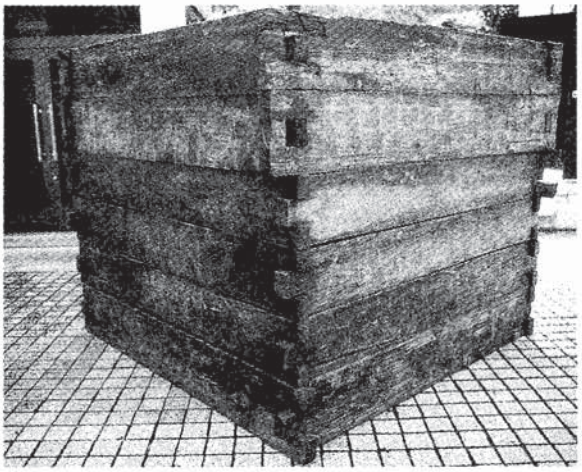


写真４　井戸枠取り上げ状況

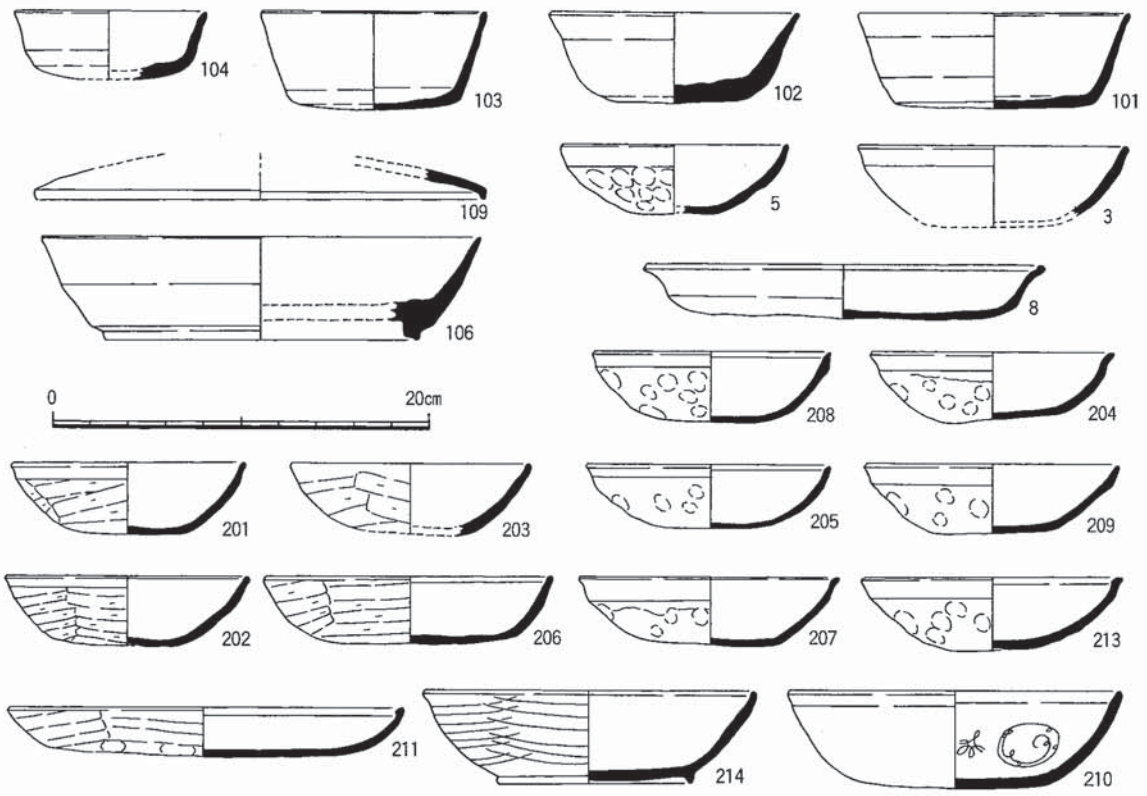
## Ⅲ．出土土器からみた井戸の年代

ここでは井戸の掘削時期を検討するために、掘形・石敷内・石敷直上出土土器を図示した[1]。詳細については明日香村1988及び相原1999で報告・検討しているのでそちらに譲るとして、必要な範囲で説明をしておきたい[2]。

101～104・106・109は掘形から出土した土器である。全体に量が少なく、須恵器が主体をしめ、土師器はごく少量である。形式的なまとまりがなく、７世紀～８世紀前半のものまである。しかし、106・109などは時期を決定し難い。これらのことから掘形出土土器だけでは井戸の掘削時期を特定することは難しいと考えられる。

次に示したのが井戸内から出土した土器である。３・５・８は井戸底に敷かれている石敷内から出土した土器、201～211・213・214は石敷直上出土土器である。これらは量的にも形式的にもまとまっており、「小治田宮」墨書土器もここからまとまって出土している。椀Ａはｃ手法、椀Ｃはｅ手法で共に、平城宮土器Ⅵ・南都Ⅰ中にあたる。黒色土器も同時期である。石敷内と石敷直上出土土器が同形式であり、墨書土器の出土状況からみて、これらの土器が井戸の掘削時期と比較的ちかい段階に投棄されたと推定している。

下層堆積土出土土器は井戸の使用時の土器で、平城宮土器Ⅵ・南都Ⅰ中～平城宮土器Ⅶ・南




第１図　雷丘東方遺跡ＳＥ０１出土土器（１：４）

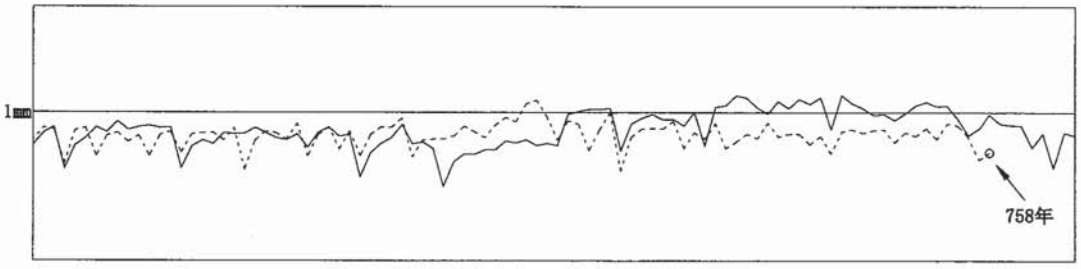
都Ⅰ新の時期にあたる。中層堆積土は埋め立て土で、堆積土量の割には土器の出土量が少なく、形式的にも南都Ⅰ中～南都Ⅱ古とまとまりがない。上層出土土器は南都Ⅱ中、最上層出土土器もまとまりがないが、南都Ⅱ古～Ⅱ新にあたる。

以上のことから出土土器からみると、この井戸は平城宮土器Ⅵ・南都Ⅰ期中段階（８世紀末～９世紀初頭）に近い時期に作られ、平城宮土器Ⅶ・南都Ⅰ期新段階（９世紀前半）にわたって使用、南都Ⅱ中（９世紀後半）には完全に埋められていたと考えられる。

## Ⅳ．井戸枠の年輪年代

低湿地遺跡の発掘調査では、各種の木材が出土することが多い。なかでもヒノキ、スギ、コウヤマキの大形木材（柱根、井戸枠、建築部材、井筒、木棺、板材…）などは、年輪年代法にとって、好個の対象試料となる。

昭和62年に実施された雷丘東方遺跡の調査では、大形の井戸（ＳＥ０１）が発見された。井戸は井籠組（方形横板組隅柱横桟止め）でヒノキの板材が８段にわたって遺存していた。




第２図　暦年標準パターングラフと井戸枠の年輪パターン

今回、井戸枠のなかから年輪が100層以上刻まれていると思われるものを４点選定し、年代測定を行った。このうち年輪年代が確定したのは２枚であった。以下にその結果を報告する。

**試料と方法**

４枚の板材には一部に辺材部の遺存する形状のもの（辺材型）が３枚あった。木取りは、柾目取りのものが１枚、板目取りのものが３枚あった。これらはすでにＰＥＧ処理が施されていたため、井戸枠から直接年輪幅を計測することはできなかった。そこで、井戸枠の端部を切断し、その木口面から専用の年輪読み取り器を使用して年輪幅の計測を行った。年代を割り出す際に基準となるヒノキの暦年標準パターンには、おもに平城宮跡出土の柱根類で作成したもの（紀元前37年～西暦838年分）を使用した。コンピュータによる年輪パターンの照合には、相関分析手法を使った（田中1990）。

**結　　果**

４枚の井戸枠の計測年輪数は、一応の目安としている100層をこえるものばかりであった。これら４枚の試料パターンと暦年標準パターンとの照合は、１－２、１－３の２点が成立し、それぞれの年輪年代を確定できた（表１参照）。１－２が758年、１－３が676年であった。１－２は辺材部が３㎝残存している辺材型で、ほぼ完存しているものと判断した。したがって、この井戸枠の年輪年代は原木の伐採年に近い年代とみて間違いない。

井戸内から出土した土器の年代観によると、前章で示されたように８世紀末頃に造られ、９世紀後半頃には埋めもどされたと推察されている。とすれば、年輪年代とは築造年代が30年前後ズレている。これまで井戸枠の年輪年代は、井戸枠内の出土土器より古く出る傾向にある。それは井戸を造った後に後世の土器が入り込む可能性があるからである。井戸の年輪年代と出土土器との関連性をみるには、井戸の掘形から出土した土器が重要なカギを握っている。しかし、今回の井戸の掘形からは明確な年代を示す土器の出土が少ないので難しいが、次章で若干の検討を試みたい。

| 試料 | 計測年輪数 | 年輪年代 | 形状 |
|---|---|---|---|
| 井戸枠１－２ | １１３ | ７５８ | 辺材型（３．０㎝） |
| １－３ | １６１ | ６７６ | 心材型 |
| １－４ | ３２８ | － | 辺材型（１．２㎝） |
| １－６ | １４６ | － | 辺材型（２．８㎝） |

表１　井戸枠材の年輪年代測定結果一覧表

## Ｖ．まとめにかえて～年輪年代と出土土器

これまでは井戸内の石敷直上から出土した土器形式から井戸の掘削年代について推定してきた。しかし、新たに行った年輪年代測定法による井戸枠材の伐採年代によって、井戸の開削年代を推定することができた。ここでは年輪年代と出土土器の整合性、その歴史評価について記して、まとめにかえたい。

井戸の掘削時期を考古学的に推定するには、掘形出土土器の年代がひとつの参考になる。しかし、今回の掘形出土土器は数も少なく、形式的にもまとまりはない。これだけでは時期を決定し難い。そこで次に石敷内及び石敷直上から出土した土器が参考になる。ただし、本来この

土器も掘削の下限を示すにすぎず、井戸の掘削時期をそこからどれだけ見積もれば良いのかはわからない。ただし、今回のように石敷直上の土器が形式的にまとまっており、「小治田宮」墨書が十数点もあることから、井戸の掘削から比較的近い時期に投棄されたものと推定してきた。

しかし、年輪年代測定による井戸枠材の年輪年代が758年という数値を得ており、土器形式との間には30年近い開きがある。現在の土器編年では平城宮土器Ⅵの実年代の一点をここまで遡らせることは難しく、これを整合的に解釈するには、この井戸が758年頃に伐採された材で作られ、比較的綺麗な状態で20～30年間使用、井戸底に堆積が始まったのが８世紀末頃と理解することである。ただし、この場合でも石敷の中の土器が平城宮土器Ⅵであることから、この頃に石敷を施した、あるいは井戸浚えをしていたことが考えられる。

では改めてこの井戸の掘削から廃絶までを、雷丘東方遺跡第１次調査の時期区分に照らしてみよう（奈文研1980）。第１次調査では大きく３期に時期区分され、それぞれの時期を、Ⅰ期は７世紀後半、Ⅱ期は天平末年（748）頃を上限とし、天平宝字末年（764）頃を下限とする。Ⅲ－１期は天平宝字末年頃を上限とし、Ⅲ－２期は平安時代初頭を上限とする時期に求めている。これらとの整合性では今回の井戸はⅡ期の遺構と共に758年頃に作られ、Ⅲ－２期まで存続する。その後９世紀前半には埋没がかなり始まっており、９世紀後半には完全に埋められていたと考えられる。また、『続日本紀』によると淳仁天皇は天平宝字４年（760）８月～同５年１月まで小治田宮に行幸している。この時には小治田宮造営の記事はみられないことから、すでに小治田宮は存在していたと考えられよう。このことは先の井戸の年代やⅡ期の遺構の年代とも矛盾せず、淳仁天皇の行幸したのはⅡ期の遺構群であったと考えられる。また、758年は淳仁天皇が即位した年であることからも、井戸の掘削、さらに言えば小治田宮の造営・整備が淳仁朝の政策の一環であったことが伺える。

今回の年輪年代測定法による年代は奈良時代の小治田宮についての新たな情報を提供した。これは『続日本紀』の淳仁朝の内容とも符合する。従来、８世紀末の井戸の掘削とみた場合、文献に対比する史料がなく理解しずらかった面をもつが、今回の年輪年代で井戸の開削年代の評価についても整合性のある見解を得ることが可能となった。今後も多くの点で慎重な検討は望まれるが、考古学と年輪年代学、考古学と自然科学との共同研究による検証作業を通して、より真実の歴史に近づいていくものと確信している。

本稿の内容についてはⅣを光谷が、ⅠⅡⅢⅤを相原が執筆した。また、本稿を成すにあたっては北村憲彦・西光慎治・竹田政敬・三好美穂の各氏をはじめ多くの方々よりご協力・ご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。　（平成13年12月19日稿了）

註

1）　土器番号は明日香村1988に準拠する。

2）　奈良・平安時代の土器編年については奈文研1976ｂ・三好1996に準拠する。

**参考・引用文献**

相原嘉之1999　「小治田宮の土器－雷丘東方遺跡出土土器の再検討－」『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集－』同刊行会

明日香村教育委員会1988　『雷丘東方遺跡　第３次発掘調査概報』

田中琢・光谷拓実1990　『年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－』奈良国立文化財研究所学報第48冊

奈良国立文化財研究所1976a『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ』

奈良国立文化財研究所1976b『平城宮発掘調査報告Ⅶ』

奈良国立文化財研究所1980　『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ』

三好美穂1996　「南都における平安時代前半期の土器様相」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1995』